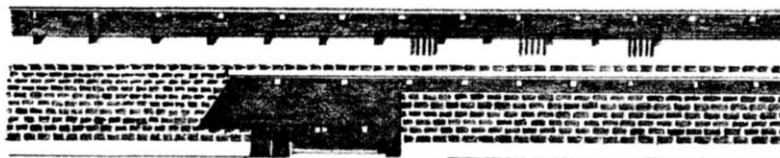


## 大和文華館の生立(その5)

おいたち

大和文華館館長 石澤正男



「美のたより」33, 34の両号とも前館長矢代幸雄先生の追悼にあてましたので、それまで続けてきた生立の記に少し空白が生じましたが、この号から再開することになります。

32号では敗戦が数ヶ月後に迫っている極度に緊迫した時期に近鉄幹部の英断により貴重なⅠ家文庫が購入され、それが今も文華館の美術関係の蔵書の核心となっていて、吾々ばかりでなく多数の学究にとっても大なる恩恵を与えているという、一つの秘話をお伝えしました。

この事があってから間もなく日本は、日本に無条件降伏を通告する連合軍(米・英・ソ・中国)の最後共同宣言、いわゆるポツダム宣言を受諾することとなり、8月15日正午、吾々国民にとっては正に青天の霹靂というべき終戦の詔勅の放送が行われました。それから約7年間にわたる間、吾々は日本の歴史始まって以来一度も経験したことのない敗戦国民としての屈辱と苦難の生活を耐え忍ばざるをえなかったのであります。

敗戦当時の種田さんは近鉄社長の重責の他に幾多の要職をかねておられましたが、お気の毒なことにはこの年の1月に長らく病床にあった秀子夫人が遂に長逝され、ま

た戦時中の激務からご自分の健康も害されていたご様子でした。そのため却ってご自分としては、やりかけてきた仕事を少しでも早く進めたいというお気持ちがあったと想像されます。それで終戦後間もなく矢代先生を呼び、種田さんが長い間念願とされていた次元の高い文化施設(このことについては31号の種田社長が矢代先生を迎える時の言葉にやや詳しく述べておきましたからご参照下さい)の具休案を早く見せてくれるように督促されたそうです。そこで矢代先生は年来考えてこられた美術館の構想を打ち明けられたところ全面的に賛成され、その結果として財団法人大和文華館の設立となったのであります。この点についてはご面倒でもお手許にある「美のたより」29号の大和文華館の生立(その1)をもう一度お読み願いたいと存じます。

ここで大和文華館という名称について少し書きとめておきたいと思えます。この名称だけでは判然とした性格や事業内容は直接浮んでこない、文華の代りに美術の2字をなぜ使わなかったのだ、という質問を受けたことが度々ありました。この点については「美のたより」33号の矢代幸雄前館長追悼特集号に「道明寺の頃の矢代先生」

と題して寄稿して下さった谷田岡次氏の文中に説明されておりますからご記憶の方もあると思いますが、要略しますと大東亜戦争中、谷田氏が勤務されていた中国南京の首都博物館では自然科学、自然史学を対象とする部門を「物華館」、美術工芸、考古学を対象とする部門を「文華館」と称していたそうで、それを谷田氏の案内で參觀された矢代先生は「流石に中国は文字の国だね」と感心しておられたそうですが、矢代先生はこの中国の用語が気に入られただけでなく立派な典拠が後漢書にあることを谷田氏から聞き、それで種田社長その他の役員の同意を得て財団の名称とされたのでした。

私がいつも特筆大書しておきたいと思うことは種田社長の文化事業に対する絶えざる熱情と、それを実行に移すに要する驚くべき勇氣と英断、機を見る洞察力の非凡さ、それに人に対する信義と信頼の念が強く、確固不動のものをもっておられた点であります。大和文華館の発足した昭和21年5月頃といえば、まだ終戦後早々の時であり、日本の社会全体が敗戦の虚脱状態に陥っていました。一部の閣屋を除いた国民一般は極端な食料その他の生活物資の不足と天井知らずのインフレーションの激化で

苦悩に喘いでいた時代であります。このような時期には、えてして不要ではないことは明らかではあっても不急と看なされて、中止されるか、或は少くとも延期されがちなのが金がかかって非生産的な文化事業であります。それを敢然として実行に移された種田社長の態度は誠に勇氣のある、いかにも種田さんらしい大英断を示されたものでした。しかし今からふりかえって見れば、この大英断は最大の讃辞を捧げるのに値する先見の明を発揮されたものというべきでした。この頃はその日その日の生活に追われる庶民の苦難はいわゆる売り食いの言葉で代表される悲惨なものでしたが、しかし持てる人々に対しても経済民主化とインフレ阻止のための手段として行われた財閥解体、農地解放、財産税、新円切替等々、次ぎ次ぎに占領軍の指示によってとられた思い切った手厳しい処置のため、それを切り抜けるために市場に手離された美術品は夥しいものがありました。それはいうまでもなく、これから美術品を収集しようという立場から見れば、将に千載一遇ともいうべき絶好の時期でした。

(つづく・51. 2. 16)

季刊 美のたより No.35

昭和51年 3月10日

発行 大和文華館